2025 vol. 3
110巻第3号　発行2025年8月1日
編集・発行 日本青年団協議会
〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4-1日本青年館5階
TEL 03-6452-9025　FAX 03-6452-9026
MAIL dan_news@dan.or.jp
Web https://www.dan.or.jp/

日本青年団新聞

Youth Post

被爆・戦後８０年の夏、今、平和について考える

「Youth Post・ユースポスト」とは、青年の活動や想いが全国に届くことを願って、Youth・ユース（青年）と Post・ポスト（郵便物）を組み合わせたものです。
本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

まちを支える一人ひとりの誇り

～新宿での演舞をモチベーションに（沖縄県うるま市）～

◆地元との密接な関係

赤野区青年会（赤野青年会とも）には、中高生から25歳までの若者約40人が集う。沖縄本島では、地区ごとに青年会がある。*エイサーをはじめ伝統芸能に取り組むところが多く、同青年会でもエイサーに力を入れる。また赤野区では「地域あっての青年会」との考えから、小学校でのエイサー指導を行うほか、子どもたちとのクリスマス会の開催、地区の川や公園の清掃・草刈りを定期的に行うなど地域のため活動する。青年会というと地元の若者の集まりと考えがちだが、実際には同青年会長の眞喜志晃二朗（まきしこうじろう）さん（21）を含め、メンバーの約8割は他の地区出身である。子どもの頃に赤野区のエイサーを踊った、など赤野区との出会いはそれぞれ。5月から週に3回、平日夜に地区内の公園で地域から応援されながら全体練習を重ねる。旧盆の時期には年ごと自治会長の方と協議のうえ、住民の自宅前や人が集まりやすい場所数カ所で演舞する。

休憩しながら区内を綺麗に

◆成長の場・青年会

中高生が約4分の1と多い同青年会。中高生は大人と話す機会も少なく人間関係が限定されがちなこともあり、口数や会話が少ない場合もある。しかし日々の練習など大人と一緒に物事に取り組むうち、距離感や接し方を自然と学びとることも多い。例えば眞喜志さんは元々内気な性格でだったが、演舞を通して公私ともに自信を身につけた。成人式の代表あいさつや大学でグループ活動のリーダーを務めるなど、新しい自分に出会うことができたのも青年会での経験があったからだと語る。

◆自信と誇りが原動力

同青年会は、7月26日に東京・新宿駅前で開催される新宿エイサーまつり2025に出場する。コロナ禍で加入者が減少していた時期、青年会に入りたてで先輩との距離感も感じていた眞喜志さん。自身の体験として、2年前の栃木・宇都宮市での演舞派遣の準備を進める中で少しずつコミュニケーションがとれ、青年会がより一体化した実感があった。その経験から、様々な考えを持つメンバーと試行錯誤しながら同じ目標に向きあう楽しさと、やり遂げた際の達成感を感じてほしい、と出場の打診に手を挙げた。眞喜志さんは、自分の行動や成し遂げたことに対し自信や誇りを持つことで新たに挑戦できる、と意気込みをのぞかせた。

お問合せ：赤野区青年会　連絡先：赤野公民館（Tel：098-973-9212）および赤野青年会 Instagram を検索

全員で演舞に取り組むなかで、一体感を育んでいる

プランターも青年会が手入れして、
誰もが住みやすいまちをつくる

*エイサー：沖縄本島周辺で、先祖の霊を迎えるため旧盆の時期に踊られる伝統芸能。主として青年会によるものが多い。浄土宗の念仏踊りが発祥とされ、手踊りのほか太鼓を持って打ち鳴らし踊るなど、スタイルは団体により異なる

生きた記憶を未来へ

～石川の若者が追う最後の声～（石川県）

石川県青年団協議会では被爆・戦後80年に向けて、県内の戦争体験者の声を集めた記録映像づくりに、2023年から取り組んでいる。この事業は、**珠洲（すず）市青年団協議会**が2015年に行った「能登の戦争体験者を対象とした記録映像の制作」を継承したものである。これまで、大阪で空襲に遭い石川県に疎開してきた方、戦争に召集され全員の兄を亡くした方などから話を伺うことができた。

今年5月には、小松市に住む男性に取材を行った。満蒙（まんもう）開拓青少年義勇軍として旧満州に渡り、関東軍に召集された男性は、現地で終戦を迎え、そのままシベリアに抑留された経験を持つ。抑留中、過酷な寒さによる凍傷で手足の指を失った人、飢えに苦しみ毒草や毒キノコまで口にした人、直前まで隣で寝ながら話していた人が直後に息を引き取った話などを聞かせてくれた。

この企画は「当時の子ども達から今の子ども達へ」をコンセプトに、戦争体験者が高齢化する中で戦争の記憶が薄れないよう、次世代に伝えていきたいという想いで活動を進めている。終戦から80年が経過し、当時のことを話せる人はほとんどいなくなっている。貴重な「生の声」を聴くことができる最後の機会になるかもしれないという責任感を持ちながら制作に当たっていく。

シベリア抑留の体験談を語る男性。御年100歳

お問合せ：石川県青年団協議会　Tel：076-252-7178

若者の力を能登へ

～青年団が届けた支援と安心～（長野県飯田市）

長野県の**飯田市連合青年団**（以下、青年団）が、石川県輪島市で能登半島地震の復興支援ボランティアに参加した。

市内を出発した5名は、乗用車1台とトラック1台に分乗し、*ボラキャンすず（ボランティアと言いながら不審な団体もいるなかで、青年団には安心して作業を任せることができた、とボランティアセンターに青年団へのお礼の電話が入ったという。

青年団は、日頃から地域行事への参加、公民館での展示や出店などの活動を通して、地域の人々との対話を重ねている。だからこそ、現地の人々に安心感を与えることができたのではないだろうか。「命がなければ人は動けない」と代表の原大和（やまと）さん（48）は語る。能登での経験を通して、飯田の防災力を発揮しながら地域を守るという意識が芽生え始めている。

長野県の飯田市連合青年団は、石川県輪島市で能登半島地震の復興支援ボランティアに参加した。市内を出発した5名は、乗用車1台とトラック1台に分乗し、ボラキャンすずに宿泊しながら、輪島市で2日間の活動にあたった。作業内容は、市内の民家で、地震で壊れた家具や家財の搬出・分別、泥出し作業。団員にはごみ処理業の経験者や土木関係の仕事をしている人もおり、作業はスムーズに進んだ。活動中には、現地の人から飲み物の差し入れをいただいたり、他のボランティアと共に作業を進めるなど、人のあたたかさを感じる場面も多数あった。また地元に帰った後、嬉しい出来事が。ボランティアと言いながら不審な団体もいるなかで、青年団には安心して作業を任せることができた、とボランティアセンターに青年団へのお礼の電話が入ったという。

現地に到着した団員たち

お問合せ：原大和さん　Mail：yamato3sun@yahoo.co.jp

*ボラキャンすず：石川県珠洲市蛸島町にある、被災地能登でボランティア活動する人たちのためのキャンプ場

地域活動ラボ

地域青年による活動はその多岐にわたる活動を通じて、まちや地域が活気づくだけでなく、人間関係の応答をとおして自分のできることが増えたり、視野が広がるという、いわば地域を担う者を育むという重要な意味を持つ。日本青年団協議会が主催する「全国地域青年『実践大賞』」は、各地の取組を集め、有識者によって評価される貴重な機会である。本企画では、実践大賞に応募された取り組みを審査に携わった審査員自らが分析し、活動の社会的な意義を明らかにしていく。昨年から始まった新連載「地域活動ラボ」。８回目となる今回は、静岡県を拠点に活動する「静岡県青年団連絡協議会」の取り組みについて紹介する。

2024年度全国地域青年「実践大賞」
審査員　熊谷　好真（よしまさ）　氏
（中日新聞社東京本社
メディアビジネス局次長）

静岡県青年団連絡協議会は、第70回静岡県青年祭の記念事業として、ディズニー映画『リトル・マーメイド』の名曲「アンダー・ザ・シー」を静岡県PRソングに替え歌した創作ミュージカル「スルガ・エレガント」を企画・上演した。

青年祭のどじまん部門終了後の打ち上げで生まれた「70回記念に何かしたい」という思いが、わずか4か月で県内全域の観光地や名産品を織り込んだ映像作品と舞台パフォーマンスへと発展。11月の第72回全国青年大会で「最優秀パフォーマンス賞」を受賞し、静岡の魅力と青年団活動の楽しさを全国に発信することに成功した。

◆地元愛が生んだ創造力の爆発

「70回の記念大会だけど、何かする?」。6月、のどじまん部門終了後の居酒屋で交わされた何気ない一言。70回記念事業として、何かしなければという消極的な気持ちもあったが、仲間との交流が深まるにつれ、その義務感は「面白いことをやってやろう」というポジティブなエネルギーへと変化していった。まさに創造力が爆発した瞬間だった。「静岡愛」を形にしたい、その一心で次々とアイデアが飛び出していく。富士山、わさび、紅茶、プラモデル、楽器――静岡が誇る日本一の数々だ。それらを余すことなく盛り込み、県内全域を偏りなく紹介したいという思いが、替え歌「マウント・フジー」に結実した。

「全国のみんなよく聞いてくれ／富士の国静岡は最高だよ」――歌詞を読むだけで、まるで静岡県周遊の旅に出かけたような気分になれる。映像制作担当の山梨美沙乃さんは、何百回もアンダー・ザ・シーを聞きながら作品を完成させた。青年団活動のパワーの源は、間違いなく「地元愛」にあることを証明した瞬間だ。

◆地道な取材が紡ぐ本物の絆

メディアの視点から見て、彼らの取り組みで最もあっぱれと言いたくなるのは、ネットで拾った画像・映像は一切使わないという徹底したこだわりだ。情報がネットに溢れる時代に、あえてすべて自分たちの足で取材するという単なる著作権への配慮を超えた、地元愛の証そのものだった。

このこだわりが思わぬ効果を生んだ。撮影協力の依頼は、青年団活動を知ってもらう絶好の機会となり、有度（うど）青年団、静岡市青年団連絡協議会、ボーイスカウト、青年団OB・OGへと協力の輪が広がっていく。

実際の撮影は、まさに静岡県縦断の旅となった。茶畑と富士山の絶景を求めて早朝から撮影に出かけ、三保の松原では観光客に混じって海岸線からの富士山を狙う。大井川鉄道では、土日の限られた時間で運行するきかんしゃトーマス列車を撮影するため、島田市の門出（かどで）駅でタイミングをうかがった。「炭火焼ハンバーグさわやか」では、全員で食べている動画を撮影し、一番おいしそうに見える表情を採用するなど、随所に遊び心も忘れない。焼津さかなセンターでは「青年団も活動費を集めないと続けられないだろう」と温かい支援を受け、本川根青年団からは直接お茶を受け取るなど、対面での交流が新たな絆を生み出した。

デジタル時代だからこそ、アナログな顔の見える関係を大切にする。この姿勢が、映像制作を超えた、地域全体を巻き込む活動へと発展させた原動力となった。

◆静岡愛が全国へ、そして未来へ

全国青年大会での上演後、「静岡に行きたくなりました!」「動画のデータをください」という反響が相次いだ。これは、地元愛がひしひしと伝わるコンテンツだからこそ生まれた共感の連鎖だ。単なる観光PRではなく、青年たちの静岡への愛が観る人の心を動かし、行動を促した。まさに理想的な情報発信の形といえる。

さらに重要なのは、この取り組みが青年団活動そのものへの認識を変えたことだ。有度青年団と連携する大学生から「青年団ってこんな楽しいことをしているのですか?」という声が上がった。伝統的な青年団活動に映像という現代的手法を融合させたことで、青年団の今を可視化することに成功した。

「私たちは青年団活動をしたいのではなく、静岡というこの大好きな場所で地域を元気に、そしてよりよい社会にしたいのです」。この言葉に、すべてが集約されている。地元愛を原動力に、仲間との交流から生まれた創造力で、静岡の魅力を全国に発信した「スルガ・エレガント」。それは、青年団活動の本質と可能性を示す、まさに記念碑的な実践となった。

●お問い合わせ
Instagramで「静岡県青年団連絡協議会」と検索

撮影した静岡おでんの写真。事業にあたって、地図や風景写真、グルメランキングを調べ、改めて静岡について学びを深めた

昨年11月の全国青年大会での様子。当日は、出場者がリトルマーメイドのキャラクターに扮して舞台上に登壇した

茶畑と富士山の写真を撮影。ネット上の情報を使用せず、自分たちの足で素材を集めることにこだわり、静岡中を駆け回った

北方領土問題
キャッチコピーの募集

みんなのアイデアが 力 になる

応募期間

令和7年 5/20（火）▶ 9/30（火）

お問い合わせ

北方領土問題キャッチコピー（令和7年度）募集係
TEL：03-5405-2065（平日 10:00～17:00）

主　催

独立行政法人北方領土問題対策協会
https://www.hoppou.go.jp/

応募方法

①～⑤のいずれかの方法でご応募下さい。

①はがきの場合 ※締切日消印有効

- この紙の必要記入事項・応募作品欄に記入
- 線にそって切り取り、はがきに貼って郵送する

②封書の場合 ※締切日消印有効

- この紙の必要記入事項・応募作品欄に記入
- 切り取らずに 封筒に入れ、下記住所に郵送する

〒105-0011 東京都港区芝公園 1-8-21-5F（㈱公募ガイド社内）
「北方領土問題キャッチコピー（令和７年度）募集係」宛

③ファックスの場合 ※当日必着

- この紙の必要記入事項・応募作品欄に記入
- 切り取らずに 下記番号にファックスを送る

03-5405-2061

④電子メールの場合 ※当日必着

- 氏名（ふりがな）・年齢（任意）・性別（任意）・職業
- 住所・電話番号・この募集を何で知ったか
- 作品（ふりがな）を記入

hoku2025@koubo.co.jp

⑤ホームページから ※当日必着

https://koubo.jp/contest/265676

ご応募にあたって

●本応募用紙の必要事項を全てご記入の上、ご応募ください。●AI（人工知能）を使用した作品の応募はご遠慮ください。●１人何作品でも応募できます。ただし、入選作品は１人１作品までとします。●入選作品は、啓発グッズ、パンフレット等に使用します。●ご応募いただいた作品は返却いたしません。また、入選作品の著作権は主催者（独立行政法人北方領土問題対策協会）に帰属します。●学校・クラス単位で応募いただく場合には、所定の応募用紙（学校用）に「学校応募添付台紙」を同封の上、お送りください。●今回の募集で得た個人情報は、入選作品の選考と発表、入選者、当選者への連絡等を目的に利用するとともに、安全に管理します。

一般応募用紙

□□□-□□□□

キリトリ

〒105-0011
東京都港区芝公園 1-8-21-5F（㈱公募ガイド社内）
「北方領土問題キャッチコピー（令和７年度）募集係」宛

ふりがな 氏名	年齢（任意）
職業	性別（任意） 男 ・ 女
住所　〒	
電話番号（ハイフンなし）	
この募集は何で知りましたか？ □協会 Web サイト　□雑誌「公募ガイド」 □公募 Web サイト　□協会からの案内 □その他（　　）	

応募作品欄

作品 1	ふりがな
作品 2	ふりがな
作品 3	ふりがな

最優秀賞 5万円（１名） 賞状＋賞金

優秀賞（４名）… 賞状＋賞金 2万円
佳　作（５名）… 賞金 5,000円
参加賞（抽選で50名）
… QUOカード 1,000円相当

●同一の作品が入賞した場合、その応募者全員を入選者としますが、表彰の受賞者は選考会による抽選で１名を決定します。

●高校生以下の受賞者は、賞金にかわり図書カードを授与します。

3分でわかる！ 北方領土問題

お問い合わせ

北方領土問題キャッチコピー（令和７年度）募集係
TEL：03-5405-2065（平日 10:00～17:00）

主　催

独立行政法人北方領土問題対策協会 https://www.hoppou.go.jp/

※本応募票、応募用紙（学校用）、学校応募添付台紙は上記 URL から
ダウンロードできます。

応募の詳細は
裏面にあるよ

リーダーと語る

被爆100年に向けて描く核なき社会

社会の最前線で活躍する方と語り合い、あらゆる角度から地域を見つめる本企画。今回は、「核兵器をなくそうとするあなたのかたわらに」という想いから、一般社団法人かたわらを設立した代表理事の高橋悠太さんと対談した。戦争経験者や被爆者の想いを伝え、核兵器廃絶をめざす一般社団法人かたわらの活動に迫る。

▼一般社団法人かたわら　高橋　悠太　氏（写真左）　たかはし・ゆうた。2000年広島県福山市生まれ。一般社団法人かたわら代表理事。中学1年生の時に被爆者たちと出会い、核問題に関わり始める。共著「ハンセン病問題から学び、伝える」。核兵器廃絶日本ＮＧＯ連絡会幹事や一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク理事も務める。
▼日本青年団協議会会長　杉山　和義（写真右）
すぎやま・かずよし。1983年生まれ。静岡県島田市在住。2012年、静岡県青年団連絡協議会に入会。日本青年団協議会役員を経て、2025年より同会長。

◆核問題との出会い

（杉山）高橋さんが、核の問題に関わるようになったきっかけについて教えてください。

（高橋）中高生の頃、学校のヒューマンライツ部に所属しており、被爆者への聞き取りや核廃絶の署名活動などを行っていました。署名活動では「核武装が必要」という声もあり、社会の多様な意見に触れました。また部活動の一環として、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の当時の代表委員でもあった坪井直（すなお）さんと出会い、2日間に渡ってお話を伺うことができました。その時のお話を基に、自分たちで「にんげん坪井直 魂の叫び」という冊子をつくりました。この経験が私の平和活動の原点です。

（杉山）青年団の活動にも通じるお話ですね。私たちも誰かに指示をされて動くのではなく、それぞれ意見を出し合って考え、行動しています。

（高橋）大学に進学してからは「KNOW NUKES（ノーニュークス） TOKYO」という学生団体を立ち上げました。核兵器禁止条約の第1回締約国会議への日本政府の不参加に抗議し、署名を集め外務省に提出しました。そして大学卒業後に、「かたわら」を立ち上げました。

◆核の現実と「かたわら」の平和への実践

（杉山）「かたわら」の事業について教えてください。

（高橋）主な活動は政策提言と教育事業の2つです。政策提言では、現場の声を政策決定の場に届け、実行に向けた交渉を行います。国連総会やG7などに参加し、日本の市民社会の実践や、核兵器廃絶の声を届けました。現在、世界では「使える核」としての広島型の半分ほどの威力の小型核が、実戦使用を想定して開発が進められています。

（杉山）小型核に対してどう考えていますか。

（高橋）もちろん小型核であっても使用は許されないと考えます。なぜなら、被害が限定されることで地域内に線引きが生まれ、コミュニティが破壊され人々を分断し差別を生むからです。こうした理由から小型核の使用禁止を政策提言しています。

（杉山）東京電力福島第一原発事故でも補償を受けられる人・受けられない人で地域の分断が生まれました。核が地域に与える影響の大きさを感じます。

（高橋）もう一つの教育事業では、参加者が原爆投下直後の広島の状況を実際の被爆証言を基に作成した資料を基に、追体験する参加型学習を行っています。たとえば、原爆投下直後の広島市内で助けを求めている少女を救うか否か、という問題を参加者自身で考えてもらいます。その際、判断に葛藤が生じることを重視し、戦争の現実と人間の複雑な思いに触れる機会としています。また、現在世界には1万2千発以上の核兵器がありますが、その数だけでは実感しづらいため、BB弾を缶に流し込む実演を行っています。広島、長崎の分として一発ずつ入れた後、「これが世界の核兵器の数です」と伝えてから一気に流すと約1分半程の間激しい音が続きます。「怖い」「長く感じた」と感覚的に核の現実を理解するきっかけになります。

（杉山）判断に葛藤がある、というのは戦争の本質を突く問いですね。青年団でも、効率よりも人の暮らしに寄り添い、着実に豊かさを育むことを重視しています。平和を実現するためにも近道などはなく、遠回りに見えても着実に一歩一歩進めていくことが大切なのだと思います。

◆被爆・戦後100年に向けて

（高橋）個人としての主体性を奪うものが戦争なのだと思います。そして、平和は積極的に築いていかなければ得られません。一人ひとりが平和をつくっていく人になってほしいと思います。坪井直さんたち多くの被爆者は「誰にも同じ想いをさせたくない」と語っていました。彼らの声を次世代へとつないでいくことが、私たちの使命です。

（杉山）今は「証言者が減っていく時代」ですよね。そこで私たちが何を担っていくかが問われています。

（高橋）今や被爆者の平均年齢は86歳を超え、証言を直接聞ける機会は急速に失われつつあります。被爆者のいない時代に、私たちはその言葉を伝えていく責任があります。ただ伝えるだけでなく、工夫を重ねて平和への想いを語り継ぎ、平和を築きたいと考えています。

（杉山）地域での取り組みにも力を入れていると伺いました。具体的にはどのような活動でしょうか。

（高橋）地方議会での日本政府の核兵器禁止条約の署名批准を求める意見書の採択などです。たとえば徳島県鳴門市では、かたわらの講演を聞いた地元の方の働きかけで、意見書が採択されました。地域の自治体で意見書が採択されることにより、政府にも声を届けることができます。地域の戦争の記憶という視点では、原爆の模擬爆弾が実際に落とされた東京都の西東京市や、北海道に逃れた被爆者の証言など、まだまだ掘り起こすべき歴史があります。

（杉山）そうした地域の視点は、青年団としても取り組む価値がありますね。

（高橋）国連では2023年にユース担当事務次長補が誕生し、「若者には議論をかき回す役割がある」と語りました。既存の枠にとらわれず議論を再構築することが大切です。被爆・戦後100年に向け今から準備を始める必要があります。

（杉山）若い世代の平和づくりを私たちが支えていきたいと思います。

（高橋）若者には「どうリスクを管理するか」と問いかけて議論を促します。そして「核兵器は本当に必要か」を一緒に考えます。

（杉山）今日は深いお話をありがとうございました。これからも平和に向けて共に進んでいきましょう。

一般社団法人かたわらのHPはこちら→

青年団座談会

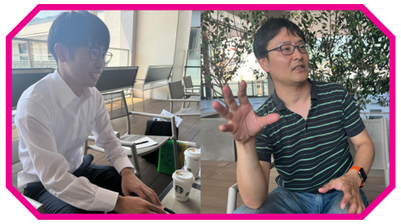
～地域で活動する若者たち～

vol. 4

機動力の高い「ゆるやかな団体」を（岡山県高梁市）

青年団と青年団以外の団体が交流することで、新たな気づきを得たり、そのつながりを次の実践にいかしてもらうことを目的とした本企画。

今回は、岡山県高梁市で行われた座談会の様子を取り上げる。5年前にも本紙に登場した佐藤さんは、今何を思っているのか。



岡山県青年団協議会

岡山県内の青年団（会）を取りまとめる青年組織。県内青年組織の交流や、子ども向け事業などを行うほか、11月に行われる全国青年大会への派遣を行っている。今回参加したのは常任理事の八木雅弘さん（28・写真左）と、監事で日本青年団協議会前会長の中園謙二さん（43・写真右）。

中野吹屋青年団

岡山県高梁市の中山間地域にある中野地域と吹屋地域の住民で構成され、約20名の団員で、地域行事の運営や草刈り、子供たちの成長を祝う会などを行っている。今回は団長の佐藤拓也さん（39）が参加した。

◆ミライ会議との関係

6月30日、猛烈な暑さの岡山県高梁（たかはし）市内。この日、**岡山県青年団協議会**と同市の**中野吹屋青年団**とが、近年オープンした高梁市図書館で対面した。これまで互いに存在は認識していたものの、共に何かに取り組む等は行っていなかったこともあり、最近の活動を伺うところからスタートした。

今、中野吹屋青年団が活動する吹屋地区には、その伝統的な街並みなどに魅力を感じた移住者の若者が集まってきている。求める暮らしのスタイルはスローライフなど、以前のような固く結ばれた地域の絆ではなく、自分の家での豊かな暮らしを求めている。だが、青年団活動は昔から慣習的に行っている取組が大半で、時代に合わせてのアップデートや若者・移住者が満足できるものを生み出すのは難しい。そこで地域の若者たちは、青年団に加えて新たな組織「吹屋に住んでみん会」を2024年に発足させ、吹屋ミライ会議を通して、吹屋のミライにつながる取り組みを実施している。今まで習慣的にやってきた草刈りや屋台の飲食出店などの青年団事業も、人手不足や安全上の懸念から、許可を持っている事業者にお任せし、青年団事業を整理。青年団として活動できる余白をつくった。吹屋の未来のためにつながる活動をミライ会議で検討し、これまで青年団が草刈りや駐車場整理などをして貯めてきた資金を使い、青年団が実行部隊となって動いている。

◆未来につながる取組

ある時、佐藤さんは地元の子どもから「会議ばっかり行っていて、俺たちに何もしないじゃないか」と言われてハッとする。青年団での会議は、次のイベントの企画や草刈りの計画など、大人の都合による大人の話ばかり。一方で学校から帰ってくるとゲームばかりしているのを見ていた佐藤さんは、自分たちの活動が子どものためになっていないと痛感。そこで子どもの遊び場をつくろうと、市の観光協会吹屋支部と連携し、2012年に廃校となった日本最古の現役小学校校舎、旧吹屋小学校のグラウンドに組み立て式サッカーゴールを設置した。すると子どもたちは毎日、サッカーで遊び始めた。青年団としてやるべきことはこういうことだ、と実感した一同。今夏には、地元の女子サッカーチームに打診し、子ども向けサッカー教室を開く計画も進む。過疎や高齢化の課題に対しては、外から人を呼ぼう、空き家を何とかしようと考えがちだが、今いる子どもなど住民を大切にすることも同時に必要だと学んだ、と言う。

◆若者が参加したい団体

佐藤さんは、ミライ会議や青年団が地域に無くても「まち」は特に変わらない、変わるのは自分自身の納得だと言う。家に帰って何もせず寝るだけの日々に少し色がついた程度が良い、と。そして、今後はそうでなければ若者が参加したい会は続かない、やってもやらなくてもいいし、やって楽しかったら続けるくらいが良い、と強調した。かつて12年前に移住した当時、熱量ある会議も多く存在したが、疲れて解散・消滅したケースを数多く目の当たりにしてきた佐藤さん。今は気軽だからこそ、魅力的な活動を生み出し続けている。ただしそれだけでは不十分とも自覚しており、他地域など横のつながりに学んで、企画を充実させたり楽しみの幅を広げることも、さらには今の時代にヒットするやり方でスピード感持ってできる体制も必要であると言い、青年団のような団体が生き残る術はそれしかない、とまで言い切った。地域の縦の関係だけではできないことも、地域を超えた横の関係やスピード感ある体制なら実現できる。

以上に八木さんは感銘を受け、今後の県青年団協議会との協力関係も申し出て、暑さの中での対面は終了した。

OPINION　ガンダムが問いかける被爆・戦後 80 年

「ガンダム」の魅力の一つは、モビルスーツ（ロボット）による激しい戦闘や、宇宙を舞台にした壮大な物語である。しかし実際には戦争の悲惨さ、そして人間が抱える業がロボットアニメの域を超えて深く描かれている。一連のシリーズはいわゆる「初代」を筆頭に、戦争においては誰もが被害者にも加害者にもなる、という厳しい現実を突きつけた。

ガンダム作品は、圧倒的な暴力として象徴的に描かれる核兵器をはじめ、武力が真の解決にはつながらないことを示す。争いを繰り返すたびに憎しみは連鎖し、新たな悲劇を生み出すばかりである。しかし「初代」に登場するララァがそうであったように、「人の革新」により生まれたニュータイプと呼ばれる存在は、互いの苦しみや争いの根源を理解し分かり合おうとする。地球連邦軍やジオン公国軍の上層部の失策に巻き込まれ、翻弄される主人公たち。中でも中心人物のアムロやシャアは、戦いの中で多くのものを失い、苦悩する。その姿は、戦争が人の心を蝕むこと、双方に対して取り返しのつかない傷跡を残すことを教えてくれる。結果的に悲劇につながる場合もあるにせよ、国家間戦争から対個人まであらゆる争いに対し、暴力によらない解決法のヒントを提示しているのである。

今年は被爆・戦後 80 年である。この機会に、戦争と平和へのメッセージをガンダム作品から学び取り、武力によらない解決策を模索しよう。たとえ「人の革新」が現実社会に起こらず、各国の首脳が争いをやめないことに絶望感や無力感を覚えたとしても、行動することが未来を担う私たちの使命だと信じている。

IKEDAN イケ団 イケてる青年団員 No.62

道産子にはなれへんけど

阪　絵里加さん（33）（長沼町青年団体協議会）

関西弁と174センチの高身長が特徴の阪さん。小さい頃から活発で動物が大好きな彼女は、家族写真には必ず鶏を抱いて写っていたり、遠く離れた祖母の家まで一輪車に乗って遊びに行ったりと、数々のおてんばエピソードの持ち主でもある。元は滋賀県の出身で、進学を機に北海道へ。現在は長沼町に住み、役場で働いている。青年団に入ったきっかけは、「友達が欲しい」という軽い気持ちだったそう。しかし、自分の興味を形にできる環境や、自身が企画した活動が多くの人に喜ばれることにやりがいを感じ、青年団活動にのめり込んでいった。

3年前からは事務局長に就任。団をまとめ上げ、近隣地域の活動にも積極的に参加するなど、活躍の幅を広げている。

一人ぼっちから始まった北海道ライフも、今や多くの友人に囲まれ、充実した日々を送っている。そんな阪さんは、生まれこそ違えど、長沼町――いや、道民の一員であることに間違いない。

これからも長沼町のため邁進していく

●安宅　信太朗さん（長沼町青年団体協議会）より投稿

編集後記

被爆・戦後 80 年の夏、国会議事堂前の集会で多様な声に触れ、改めて戦争の重みや多様な視点で考えることの大切さを実感しました。日本青年団協議会事務局に配属されて 1 年、まだまだ学ぶべきことは多くあります。本紙は 11 月号から紙面の一部を刷新し、より多くの方の声を取り入れた記事作りをめざしていきます。ぜひ下の QR コードから、ご意見や写真をお寄せください。（じ）

NISSEIKYO

ご意見待ってます！

https://forms.gle/pUzfmgVdWNAHugXa7

はらぺこ青年団

地元の名物を支局員が青年団のエピソードとあわせてご紹介。

市内の小垣江町にある、長楽（ちょうらく）という中華料理店にお世話になっている私たち。いつから通っているか分からないほど、長年にわたり青年団の馴染みである。あらゆる場面でお世話になっており、団員一人ひとりに好きな料理がある。全員でおすすめを選ぼうとすると協議会が空中分解する（笑）。そのため独断と偏見で私が選ぶおすすめは「長楽飯」だ。炒めた肉と玉ねぎの上に目玉焼きが乗ったどんぶり飯で、一度食べたら最後、リピートが止まらない。みなさんもぜひ虜になってほしい。私たちの活動は、このお店に支えられているといっても過言ではない。

●村岡　恭弥さん（刈谷市青年団協議会）より投稿